

昭和二十四年七月二十五日發行(第三種郵便物認可)
(毎月一回・十五日發行)

(通第七十二号)

慈

光

目 次

法 味 滴 々……………池山栄吉…(1)
世間虚仮唯仏是真……………花田正夫…(2)
自 然 法 爾(三)……………自在丸 新十郎…(6)
歌心そのをりく……………柳瀬留治…(11)

第七卷

第三號

法味滴々

池山榮吉

聖人の常の仰せ

『親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし』と、よきひとの仰せをかうむりて信じられた利那聖人の心肝にしみ出た文字。

『彌陀の五劫思惟の願をよく〜案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ』

とあるが、聖人の常の仰せである。

これは聖人の獲信の原体験であり、同時にまた、其後につづくもろもろの体験の^{シタテ}下地である。だから聖人のどの御述懐でもよい。たとへば歎異抄にある御言葉の一つに見入つてみるがよい。きつとその底から、この文字がしみ出してくる。啄木の歌に

『灯影なき室に我あり、
父と母、壁の中より杖つきて出づ』

とあるやうに。

昭和八年九月。信道会館発行奉行録。

俱会一處

『今生夢のうちの契をしるべとして、来生の悟の前の縁を結ばんとなり。われ後れなば、人に導かれ、われさきだたば、人を導きて、世々に知識となり、生々に善友となりて、ながく迷軌を絶たむ』

亡き妻が不治の病にかかつて、それとしたとき、悲歎の中から、うしろさの身にもあまるを覚えたのは、唯信鈔の結びのこの文であつた。

『樂しきはじめ憶ふごと、哀しきはほり堪へがたし』

やがて幽明さかひをへだてても、心と心とは永久に結びつけられて浄土の対面を期することが出来るからである。

註。大正六年奥様が胃癌にて死の宣告をうけられ、それが機縁となつて決定信を獲られ、大正七年の春には生別に死別をかねられた送別会を奇しくも銀婚式の年に催され。近角先生を始め有縁の同朋と心ゆくまで別れを惜しまれました。

世間虚假 唯佛是真

花田正夫

前号で橘女^玉が、太子の御持言、世間虚假、唯佛是真、を身をもつて聞きとつて下され、銘文として遠く末代に残して下さつたことを述べました。

本号では、太子を佛と仰ぎ、親と慕ひ、菩薩と礼し奉られた親鸞聖人がこの金言実語を如何やうに身説せられてあるかを中心として、そこに我共への慈訓を頂きませう。

瞑目一番、先づ第一に心に浮びますが、歎異抄の総結文にある大切な証文であります。

『煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞ、まことにておはします』

これは聖人が太子の御持言をそのまゝ、和訓せられ、その和訓のままを常に繰り返して申されてゐたとうかがはれ、それを唯圓大徳が耳の底に残されたものであります。

次に想ひ浮びますが、教行信証の眼目とも申すべき、

信卷の至心釈の一文であります。

『佛意はかり難し。然りと雖もひそかにこの心を推するに一切の群生海、無始よりこのがた、乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清淨の心なく、虚仮詭偽にして真実の心なし。是を以て、如来一切の苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざる無く、真心ならざる無し。如来清淨の真心を以て圓融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心をもつて、諸有の一切煩惱、悪業、邪智の群生海に回施したまへり』

この御釈は、聖人御自ら心血を注がれて、遠く末代の我等に、太子の御持言を、詳細に、具体的に御示し下されたと感佩申すのであります。もとより聖人がそれを御自覚なされて仰せられたのではありませんでせうが、前聖と後賢が全く揆を一にせられて、そこに同一人格のおのづからなる再現を仰ぐ次第であります。

世間は虚仮なり

先づ『世間』について、衆生世間と器世間とあります。即ち器世間は国土であり、衆生世間とは住人であります。迷ひの境涯をはなれた、覚者の世間では、淨土と佛及聖衆に分れるのでありますが、迷ひの境涯である娑婆の世間では、住人は煩惱具足の凡夫であり、国土は火宅無常の世界であります。

さうでありますから『世間は虚仮なり』といはれる世間とは煩惱具足の凡夫が衆生世間であり、火宅無常の世界が器世間であります。

更に『煩惱具足の凡夫』について聖人は、一多証文の末に『凡夫といふは無明、煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほくいかり腹立ちそねみねたむ心多くひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらずきえずたえずと、水火二河の譬にあらはれたり』と囃んでふくめるやうに、腹を割つて表白されて居ります。

次に『火宅無常の世界』については、聖徳太子が精根を傾けて御註釈下さつた法華經の最も有名な『火宅三車の譬』に示されるところであります。煩惱の焰は熾んに燃え、家も庫も塔も焼け崩れようとして居り、その火焰の中を、毒蛇猛獸、惡鬼羅刹が横行し乱動してある世界であります。經文の一字一字を辿つて居りますと、凄然として身の毛の

よだつものがあります。これが私共の住む器世間の実態であると佛のかねて説きおかれたところであります。

さて麻の中の蓬と譬えられる如く、如何に曲りくねるを性としたよもぎも、真直ぐな麻の中で生長すると、自然に真直ぐになるのでありますが、悲しい哉、煩惱具足の私共すでに枉れる者であり、然も火宅無常の世界に住むのでありますから、内も外も、上も下も、身も心も、善といふも惡といふも、みなもつてをらごと、たわごと、まことあることなしであります。

『一切の群生海、無始よりこのかた、穢惡汗染にして清淨の心なく、虚仮認僞にして真実の心なし』

との聖人の御自釈は、萬古不易の至言であります。然し是処で一言加へますことは、器世間と衆生世間に分けましたけれども、小鳥とその巢との關係でありまして、小鳥が巢に住みますが、その巢は小鳥が造つたものであるやうに器世間と申すのも、煩惱具足の私共が遠い昔から、織りなした、罪業深重な者の自業自得の産物であります。そこで器世間の火宅無常の世界は、衆生世間である煩惱具足の凡夫の我等に帰して了ふわけであります。

そこに『世間虚仮』の金言を換言いたしますと『煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死を離るることあるべか

らざる』とあります歎異抄の三條に相当いたします。又二條の『いづれの行も及び難き身なれば、ととも地獄は一定すみかぞかし』にも相当いたしきす。

唯佛のみ是れ眞なり

『唯佛のみ』とありますが、唯の一字は『唯はただこのことひとつといふ、ふたつならぶことを嫌ふことばなり。また唯はひとりといふところなり』と唯信鈔文意に申されてあります。即ち佛のまことは絶対であるとの思し召しであります。絶対の眞実でありますから、衆生は虚仮であるが、佛は清淨であり眞実であるといふ風に、黒に對して白、といふのではありません。さうではなく、絶対のまこととはまことならぬものを見抜いて、そのものを飽くまでも捨てずして、遂にはとろかして了はずにはおかぬといふ、広大無辺な眞実で、如何程濁つた水もそれに無限に清淨な水を注がれると遂には淨化されて了ふのであります。

是処で我身の脚下を省みますに、狂人は狂を覚りません虚仮の身はそれをそれと自覚いたしません。火宅無常と聞きましても一向におどろきません、性こりもなく夢から夢を追うてやみません。法華經の譬にあります如く、火宅にあつてあそびほうけて危険を知らないのでありますから、親の身はたまつたものではありません。

煩

「般舟三昧」にも「敬うて一切往生の知識等にもうさく。大いにすべからく慚愧すべし。釈迦如来は実には是れ慈悲の父母なり、種々の方便をして我等が無上の信心を發起せしめ給ふ」とあります。衆生の虚仮不実にして永遠に浮ぶ瀬の無いことを、佛陀のみよく知ろし召して、この者のために種々に善巧方便をめぐらして下さるのであります。

『是を以て、如來一切の苦惱の衆生海を悲憫して云々』

『如来の作願をたづねれば、苦惱の有情をすてずして』と申されるのもこのことであります。この広大な御眞実を聞きまつて『他力の悲願は斯くの如き我等がためなりけり』と、信ぜしめられるのであります。それがそのまま『ただ念佛のみぞまことにておはします』の信証であります。

実語の建現

以上は大體聖人の御言葉を想ひ浮べながら、太子の金言を述べて参りました。今度は、絵や書が紙面に描かれます如くに、この実語が人生生活の紙面に建現されて参ります模様を誌しませう。

第一に、歎異抄の第四條『聖道の慈悲といふはものをあはれみ悲しみはぐくむなり、しかれども思ふが如く助け遂

ぐることを極めてありがたし云々。今生^にいかにいとほしふびんと思ふとも存知の如くたすけ難ければこの慈悲始終なし』が世間虚仮の相であり『念佛して(十八願)いそぎ佛に成りて(十一願)大慈大悲心をもて思ふが如く衆生を利益する(二十二願)』が唯佛是真の救済であり『しかれば念佛申すのみぞ末徹りたる大慈悲心』とありますのが『ただ念佛のみぞまこと』に相当いたします。

次に第六條の師弟子の問題で『専修念佛のともがらの、わが弟子ひとりの弟子といふ相論の候ふらんこともてのほかな子細なり』が世間虚仮であり、『自然のことわりにあひかなはば、佛恩をも知りまた師の恩をも知るべきなり』が唯佛是真の建現であります。

更に九條では『踊躍歡喜の心おろそかに候ふこと、又いそぎ淨土に参りたき心の候はぬ』とあるのが虚仮の相であり『煩惱具足、煩惱興盛』のために障へられるのであります。ここに『佛かねてしろし召し、云々。ことに憫みたまふ』が佛の是真であり、そこに『いよく』大悲大願はたのもしく往生は決定』と諦忍せられるのであります。

有名な二條では『ただ念佛して彌陀にたすけられまらすべし』が、唯佛是真であり『いづれの行も及びがたき身を御生命の限りをつくして掲げ示して下されて居ります。

なれば、とても地獄は一定すみかぞかし』が世間虚仮であります。

斯様にして歎異抄のいたるところに、世間虚仮と唯佛是真の血が通うて脈打つてゐるのが知られます。恰も身体の到る処に、動脈血と静脈血が流來流去してゐて、一つは養分と酸素を送り込み、一つは老廢物と炭酸瓦斯を送り出して、この動靜兩脈血によつて人の生命が支へられるが如く、世間虚仮と唯佛是真の生きた血潮が私共の生活の全野に脉打つて、念佛成佛せしめて下さるのであります。

想へば太子の御持言こそは、これひとつで人生の暗黒はことごとく破られて、他力の善提心が成就せられるのであります。私共もこの実話をせめて口眞似し、更に身に頂き心に仰いで、このまことのひかりといのちに護持養育を蒙りつつ、無尽灯として世に伝承させて頂きたいのであります。

むべなる哉、聖人の御生涯の終りに『淨土真宗に歸すれども、眞実の心はありがたし、虚仮不実のわが身に、清淨の心もさらになし。外儀のすがたはひとごととに、賢善精進現ぜしむ、貧賤邪偽おほきゆる奸詐もはし身にみたり悪性さらにやめ難し、こころは蛇蝎のごとくなり、修善も雜毒なるゆゑに、虚仮の行とぞなづけたる云々』と世間虚

茲に広く太子の恩徳を謝し、且は篤く聖人の慈育を隨喜し奉る次第であります。

祖師にきゝてしたひまつうん聖太子父の如くに母の如くに (池山先生詠)

自然法爾 (三)

自在丸新十郎

善惡の真相と信心の智慧
人生には色々ごたごたした事件が起つてゐますが、結局、自分はいが相手がいかぬとか、自分は正義をふんでゐるのに、あいつは不正義だとか、自分は正直だが、あいつは嘘つきだとか、総ては道德的な判断の違ひから來てるやうです。善惡邪正の判断の基礎が確立されてゐない所に盲点があります。例へば、人を殺すといふことも、国家が人を殺す場合は差支へがない、個人が人を殺しますと、殺人罪には殺さうと、いかに咎であります。また過去の時代によいとされた事柄が、現代ではよくないとされることとがあります。国で定めた法律が、時代により人によつて

も、解釈が違ふことがあります。これは結局善惡といふか、正義不正義といふか、そんなもの、境界が甚だ不鮮明な点にあるのでないでせうか、否、善惡邪正の境界が本當の意味では存在しないのでは無いでせうか。

善惡邪正は何であれ、人間社会の規範であります。だからその前提として、人間社会の存在といふことが先決問題にならねばなりません。人間社会がある以上、正邪善惡を分つ規範が必須不可欠であることは申す迄もないにしても人間社会が眞実に存在するかどうか、といふことになれば前に述べた様にその返答は否定的であります。素粒子の世界に人間として分たれた一団の世界があらう筈はありません。総てが素粒子といふのに、素粒子でない人間があるやう

善はありません。人間社会のない所に、どうして善悪正邪がありませうか。

このやうに、本当の意味では存在してゐない善悪正邪をふりかざして、己はよい彼奴はいかぬと、お互争ひ合つてゐるのが現実です。正しく迷界であります。眞実の世界ではありません。眞実の世界には善悪正邪はない、否善のみ世界、正のみの世界であります故に差別はありません。正しく法身の世界であります。

だがそんなことをいくらだら／＼と詳しく論理的に説明しましても、私達の日々の実生活が、それをそのまゝ呑みこんでくれません。結果はどうかといふに、己はよい、彼奴はいかぬといふことになつてしまひます。こゝには理窟はありません。理窟はどうでもつけられます。理窟だけでは行為は指導されません。行為が先だつからです。

それ故私達が眞に善悪正邪を達観するといふか、私達の心の内で己はよい、彼奴はいかぬと思ひ計つて、相手をうらみ、或はかなしみ、或は怒つてゐる煩惱の有様をありのまゝに眺むるといふか、とにかく物質的、外的自然を眺めてゐる心を、精神的、内的自然に向け直して見る必要が要請さるゝ、所以であります。然しこれ亦自分の力量を以ては伸々大変でありますから、結局は阿彌陀如来の大威神力をかりて見さして頂く外には方法はありません。かくして始めて私達は眞実には善悪正邪のないことを体認さして頂く

らぬとか、そんな程度の問題ではないのであります。考へようとしても頭に浮ばぬことです。考へやうのないものがない不思議であります。それ故計はれないものです。無始以来まだ人間の頭の中にとり入れられたことのないヴァージンそのものがこの言葉に應はしいのであつて、私達が一寸でも思議したものは、不思議なものとは申されません。佛智とか阿彌陀如来とか法身とか一如とかいつたものは、この意味に於いて有資格者でありませうか。随分色々の方面から探索したがよくわからぬ、不思議でならぬとか、不思議なことには、東京銀座の眞中で出合つたとかよく使つてゐますが、これらは原因などはどうしても判然しないとか、考へても考へても得態が知れないとかいつた場合であるから、既に人間の智慧の洗礼を取けた事柄であります。佛教での不思議はこんなものでは絶対ないのです。

佛教ではまた無分別といふ言葉が使はれてゐます。私達は『彼は無分別な人間だ』などよくいつてゐますが、こんな場合の無分別は思慮分別が足らぬとか、考へが浅いとかいふ意味で、熟慮に反する言葉であります。所が佛教での無分別は、無分別の智慧とも云はれて、分別されない様な事柄又は智慧に用ひられてゐます。否人間が全く智慧がなくなつて無智になつた場合に用ひらるべき言葉です。私は佛教の無量光とか、佛智とか、実相とか、法身の如き言葉は、その内容として無限大の威神力をもつたものだと考へ

のであります。体認といへば、いかにも善悪正邪を認知するかに受け取られ易いけれども、善悪正邪は觀念として心の上に浮んで来ないのであります。善悪正邪の觀念が浮ばぬといふことは、善悪正邪は本来ないからだとも考へられませうが、善悪正邪について、思惟判断する当方がないからだとも受け取られませう。何れにせよ、私達の心に善いとか悪いとか計はないのが自然であると祖師は解釈されてゐます。不思議な御念佛に総てお任せした以上は、善かれ悪しかれ、そんな心配は少しもいらぬのです。

佛典には不思議といふ言葉が随所に使はれてゐます。他方眞実では、佛智不思議とか、名号不思議とか、誓願不思議の如く、至る所に不思議といふ言葉が出てゐます。これは佛教独特の文字ではないかと思ひます。文字通りの意味をもつた言葉で、思議されないといふことです。尤も他の宗教でも、また日常茶飯事でも、この言葉は随分使はれてはゐますが、それはいくら考へてもよく判らぬ、さつぱり判らぬ場合などによく用ひられてゐます。思議されないのではなくて思議されてゐるのです。佛教での不思議は、文字通りに思議されない場合に限つて使はれてゐます。不思議の佛智と云へば、どんなにしても私達の思慮分別の対象にはならないものだといふことであります。『如来の智慧の海は深広にして涯底はない。二乗のはかるところではない』と大無量寿經に出てゐます。考へて少しは判るとか判

させられます。だから私達が如実にこれを理解しようと思つれば、却つて私達の方の有限大の智慧が否定され零になつてしまひます。否零にされるが故に無量光は文字通り無量光となり、佛智は佛智となるのであります。数学に無限大といふ数がありますが、これに比べると、どんなに大きな数でも、またどんなに小さな数でも一様に零になります。丁度その様なもので、如実に佛智に向ふとどんなに賢い人でも愚かな人でも、無智にされます故、分別の力が全くなくなり無分別にならざるを得ないのであります。『行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを自然とはまふすぞとさふらふ』と聖人は仰せられました。正しく善だとか悪だとか思はれないのであります。思ふ程の智慧が人間になつたとも言はれませう。だがそれはともあれ、善は善のまゝ、悪は悪のまゝでありませう。善法悪法共にそのまゝ、自然であり法爾であります。善なるが故に善いとか賞めあげたいとか、悪なるが故に嫌だとかにくむとか、そんな計ひは人間にはこの場合毛頭ない筈であります。善悪共に不思議であると申す外はありません。これが自然法爾の内容とでも言はるべきものでありませうか。だから自然法爾は佛智不思議であり、念佛であり、信心であり、凡夫の計ひがすっかり取り去られた世界の表現でありませう。

称名念佛には有り難いといふ味もなければ、感謝といふ感情も毛頭ないのであります。と申しますと、怪しからぬ奴だ、称名念佛しながら有り難くもない、感謝もしないとは非道な人間だとお叱りを蒙るかも知れません。この点大いに考へて頂きたい点であります。有り難いとか感謝とかいふ心情は、念佛そのもの、信心そのものに附添はねばならぬもの、如く解していらるゝ方があるとすれば、それは大きな誤りでありませう。念佛や信心は、その味たるや誠に淡々たるもので清水のやうなものでありませうか。清水には味ひといふべきものはありません。清水に若し味ひといふものがあつたとすれば、それは眞に純粹な清水とはいはれませぬ。不純分をとかした水と申す外ありません。例へばコーヒーとかミルクとか紅茶の類であります。信心といふ清水には全然計ひといふ不純分は含まれてゐないのです。

聖人は「智慧の念佛」とも「信心の智慧」とも仰せられました。大無量寿經には「智慧と書いてあります。誠に有り難い適切な言葉と思はれます。信心は智慧であり、念佛も亦智慧であります。眞実の智慧は佛智であり、佛智以外のものは眞実の智慧とは申されません。それは権智であり、分別の智慧でありませう。いはゆる人間の智慧にすぎません。人間はこのやうな凡智のためにお互迷ひ且つ苦しみてつてゐます。これをこそ否定したい爲に私達は佛敎を求め

無臭、無感といふことであつて、有り難いとか感謝したいとか、そんな気持ちとは全く無関係であります。もしそんな気持ちも殊勝にも起るとすれば、それは人間の苦しみの心持と一脉相通するものであつて、これ亦煩惱の一種でありませうか。信心の味ひは実に淡々たること清水の如きものであります。或は明鏡止水の境と申されませうか、或は正宗の名刀に對ふ如き無想の境と申されませうか、何も心得はないのであります。名号といふ智慧の世界は、誠に冷淡嚴肅なる世界であつて、私達人間の感情思惟は全く受けつけないのであります。佛敎的表現を以てすれば、世界が一つになつたとしても、法性法身の世界とでも表現されないでせうか。思念や感情を絶した境涯であります。従つて又私達を総てから解放さして下さる世界であります。文字通り不思議の世界であります。だが一面こんな無味無臭無感情といふ殺風景な世界であればこそ、私達は總ての煩惱から脱却して頂けるのであります。従つてまたその結果として、私達は本當に有り難いといふ感謝の念が心底から沸々と湧き出るのであります。それは水が低きに流れ煙が高きにあがるやうに、誠に自然な根強い深い感情であります。こんな感情は利害得失を離れた誠に崇高な感情であり、うるはしい人生々活の基調でもあります。だがいか程崇高なものであるにせよ、それは既に人間の心に動く迷情であり凡情であるにすぎません。人間世界に於ける現象で

てゐるのであります。凡智が否定されることは、同時に佛智が頂けることだといへないでせうか。無限大を知ることによつて無限大だといふことが判ります。同様に私達が佛智を全領することは、無分別にされることによつて判るのでないでせうか。

信心といふ佛智は、如来から廻向された信心です。全領とはいへ、それは廻向されたものであります。廻向された佛智といふ信心は、私達には絶対に計はれぬものだといふことです。信心は全く凡心にはどうにもならぬしるものです。不思議な佛智は不思議の信心であり阿彌陀如来であります。信心だけはどんなにしても判らぬ筈です。頂いたやら頂かぬやら、そんなことが私達には判らう筈はありません。こんな意味で、計ひえられぬものが信心だと解釈されないものでせうか。

信心といひ念佛といひ、佛智といひ誓願といひ、自然といひ法爾といふのも、惟ふに、何れも皆名号が色々の形をとつて表現されたものでありませう。従つて名号はこれらを一貫するものでありまして、名号を外にしては信心も念佛も自然も法爾もないのであります。私達がどんなにこれらを思惟判断しようとしても、思惟判断されないのは尤もなことだといはねばなりません。

かやうに開其名号の一念に展開する宗敎の極致は、無味

あり、信心の世界、佛智の世界とはかけ離れた世界での出来事です。信心といふ佛智の世界は不思議の世界であり自然法爾の世界であります。

かく申しますと、人間生活と信心生活とは別個のやうに考へさせられます。いや事実全く違つたものではあります。信心生活を営むものは人間です。この点信心生活は人生生活に直結され、人生生活に包含されてゐます。だが人間生活は必ずしも信心生活ではないのであります。私達は信心を獲得することによつて、人間生活の中に信心生活を営み、広略相入の生活をさして頂く次第であります。即ち自然法爾の生活であります。(終り)

筑紫野春草氏歌集「雲霧」抄出

己が立てし人生觀にとらはれて己れと生きの世を
せばめゆく
我がどちの誰彼をむごく批判すれど己が足もとは
言はず互に
ひとりひとりの内をのぞけばうそぎむき独生独死
の黒きかけもつ
念佛自然の外なしといふわが意をばやうやく解し
て堯爾たり友は

歌心そのをりく

柳 瀬 留 治

無氣力を克服せしむるもの

最近わが短歌草原に対し無氣力だという評を耳にする。私もこの三ヶ月切にそれを感じている。

無氣力ということは熱意がないため現はれることで、生活理想、理想感動の缺如がさうならしめるのである。神経衰弱や病気の人は止むを得ない。それすら「病は氣から」といつて、無氣力の弱点に付け込んで発する場合が多い。まして曲りなりにも健康である限りに於て、自らの生に熱意がなくて何が出来よう。統合がなく乱れたまゝの投げやりがかく無氣力ならしめる。

常にいふ如く歌は生活の反映であつて、自らの生活に熱意のないことが、やがて作歌の上に反映して無氣力な歌となつて現はれるのである。

はあるまいか、それではまた何をかいはんやである。

己れといふ一個の人間は、現在幾十億の人類の一粒子ではあらう。又創世以来何萬年、更に將來限りない人類、世々生々の間、僅か五十年六十年の短いバトンを受継ぐに過ぎないが、自身としては広大な天地にも懸け替のない大切な自分であり、何物よりも尊い自分であるではないか。それが拙ければ拙いだけ、貧しければ貧しいだけ、あはれに愛しい己れではないか。それが世に伍して性格に悩み、生活に苦勞して僅か五十年七十年にして果てゆく運命の己れでないか、それが世に生れた甲斐として何ぞ生の眞実なるものを一つ果したいと諸君は思はないであらうか。私は本年六十であるが、この年にして猶も念々利那と雖も、眞実に生きんとする念願の絶ゆる時とてはない。

諸君よ、生活理想なしに、自らを光あらしめんとせず、己を粗末にし過ぎてゐはせぬか。己れ自らを粗末にし、卑しからしめてゐるものを、世の誰が愛敬し尊ぶう筈があらう。短い一生ながら、命に光あらしめ生き甲斐あらしめよ。うとの念を自覚めしめ喚起せしめて貰ひたい。その念願一つ持つことにより、始めて、食に追はれて暮す平凡な日々にも光をもたらし、一歛一歛たがやす汗の日々にも大きな意義を持ち来り、斯くて生活全体が大きな意義をもち、光輝あるものとなる。

己れの生活に熱意のないといふことは、その源、己れに對する自愛の念の足りないことに起因する。自愛とは単に自らをかばふことではない。人間としての生き甲斐といふか、生命の眞実を遂けしめようとする切々の念である。

堅実な物質生活、真面目な生業といふこともあるが、更に押し詰めれば、眞実な生を遂けしめるといふことにならう、如何にかして眞実な生に到らうといふことにならう。

生の眞実だの、徹した生だの、そんなことはどうでもよい。それは食ふに關係がない。それよりも金が儲かり、樂に生活が出来、面白く過され、ばよい、といふならば、文芸も作歌も、その為の娛樂に過ぎなくなり、生まれたから生きて行くといふだけで犬猫の生活とさう異ならないもので

そしてその生活の反映である作歌の上に張りをもち氣力沸々として湧き出づる。

生活の足しにもならぬ歌ではあるが、その熱意が力をもたらし、光を発し、響を伝へ、作者をして何者にも替へ難い喜びを得しめ、又読む者にとこしへの響を興へる、かくて百年の友を得ることが出来るではないか。

昭和廿六年七月、短歌草原所載

歌はどうした時出来るか

前に表現は熱意によつて成るといつた。それは体力といつたものではなく、情熱が調子に乗つて成されるもの、様である。然し情熱とのみも言ひ切れない。若しそれだと情熱的な若い世代に限られ、我々老いてそれが沈静し、平靜になつたものが歌の詠めるものがおかしいことになる。熱意といふものは情熱だけでないことは明らかと思はれる。

最近出た空穂著作集の六巻を読んだらと「M君に」といふ文章に逢つた。それを読んで迎も面白く、且つ教へられる処が大きかつた。

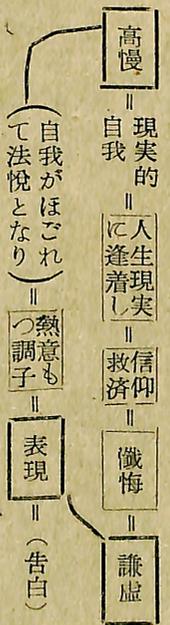
それは「常識では為事をして得る人は実力のある人で、その出来ない人は実力の無い人……実力さへ貯へられ、ば自然に為事は出来るものだと言はれてゐる」との一般の考へに對して「實際を見ると必ずしもさうではない。私の身辺

だけでも、実力はあるが為事の出来ない人は幾らもある。同時に実力はそれ程ではないが為事は相応にしているといふ人もある。……実力がなければ何も出来る筈がないが、さうかといつて実力ある丈では矢張り為事は出来ない。為事をするには実力の上へ何物か添はなければならぬといふことである」といはれ「実力と同時に調子に乗る心だ」といはれてゐる。

更に述べて「実力は謙虚な心を持つてゐる人にして始めて持てるものである。調子に乗るのは高慢な心の発露である……その反対してゐるもの一つ心に持つて同時に働かせてゐる人だけが、その人の為事を通じて自己表現を十分にしている人である。……歌を詠むといふ上にも同じく言へる事である。歌は高慢な心だけ働いてゐる時には、最も詠み易く、そして不安な時で、謙虚な心になり切つた時には詠めなく、たとへ詠んでも面白くない時である。謙虚と高慢とが同時に働く時が、歌を詠む面白味が一番深い時である」と結んでいられる。

それを読んで私は先づ考へた。「反対のものが同時に働く時」と一口にいつて、さて反対のものを同時に持つのに透徹しないあやふやの場合がある。たとへば一事につき善と悪、好きと嫌ひとを同時に考へて見れば判る。これはつまり自身に引き寄せて心に統合して見る他はない。この反

対のもの、間に立ちどうした時、私の歌が出て来るかである。私は自分の個性、性癖、自我ゆる生活生活上事に苦しむ。そしてそれが信仰の救済にあつてやうやくほされて念佛を称へる心持になり歌となつて来る。それを図に示して見ると次のやうになる。



私にはこのやうな経路をとつて歌が生れる。歌のすべてとはいへぬが、慥くも私の眞実の歌はさうした時に生れる恐らく諸君も生活現実肉に肉弾となつて當つてゐる時、高慢それがほごれて心からの詠歌になつた時、謙虚に歌が出てくるのではあるまいか。歌は誠だといふのはその眞個の自らに帰つた、それを指すのだと思はれる。

昭和廿八年六月短歌草原所載

炉邊小感

いよいよ炉辺の親しい夜頃となり、屢々思ふことである炭火を吹きおこすのに火種が一つでは容易におきない。埋火など一つしかない時、それを二つに割つて起すことにより、相關的に間から焰を立て、よく起きる。かまどに薪を

焚く時も一本になると燃えない。炭でも炭団でも十分火になり切ると単独でよく火氣を保つ。単独で火氣を保つには己れ自身の中心迄火になつてゐる要がある。これは吾々の人生に於ても同様だと思ふ。相關的に相互に助けて行くと易い。民主主義や社会主義のいはれる所以である。然しこれは生活上の便宜なためで、人間の群居本能もそれによるそれも物質生活に止まるといつてよい。親子兄弟乃至は夫婦に於ても自己の精神上の問題、生死の問題に至つては、各自まことに独生独死、独去独来である。そこに宗教の真意がある。物質上の問題でも、社会が家族が友人がと周囲にのみ関つてゐるは決がつかない。まして精神上の問題に至つては己れ自ら立つの他はない。

宗教上不朽の大道を樹てた大聖は世言を意にせず、单身親ら道に至り己の大安心を得、而して世を救ひ人を導いた全く世の毀善褒貶も迫害も意とせず信する所を獅子吼した人は群衆的に熱する。それも物質生活の利害問題、感情問題が主である。精神的要素が深まるにつれて、各自の単独になつて行く。我々単独になると消え易い胸の火であるだが己れ全体の芯の芯まで、底の底まで、火となり切つてゐるさへすれば、世俗の風に冷やされても立消えせず、愈々熾烈を加へて吹き起るのである。大聖釈迦然り、法然、親鸞も然りであつた。キリスト然り、彼の宗教改革に於けるルーテルが権勢圧迫の前に、我は斯く信ず、と断乎たる態

度で一貫したのもそうしたものによる。このことは学問の上でも芸術の上でも言へる。他はさしおきて作歌道の上で見よう。彼の中世に於て歌の真隨を説いた俊成が、真夜静寂な歌境の誠に触れて、よよと泣いたといふのもそれであらう。降つて真淵もであるが、彼は幕府の庇護の下だが、相手の景樹は一介の庶民となつて、堂上に対し單身自らの休した調べの誠を、然も老齢世を終らんとするに類し、今説かずしてはと口を極めて門弟に説いた。近くは子規もさうであり、茂吉もそれである。わが師空穂も無師單身以て己れ独自の詩を打ち樹て、歌は態度の芸なりと断ずる透徹さ、これ内に深く燃える人生的宗教的高度な火に発するものであらう。

芸術に携はり作歌に志す者は大なり小なりこの胸の火なくしては熱情の熱氣を吐くべくもない。歌壇は兎まれ角まれわが誌上では単一の焔と迄行かず二三を撮立て、火氣を保つもの、火と迄はゆかず体熱程度のものもある様である。降つて調和美の程よい程度や、人情美のなま温い甘さに安んずる事文はあつてはならぬ。

自からの心の底迄、芯の芯まで熱し融けるといふことは特に芸術人に要するに非ず、凡て人間に於て、真に人間たるや否や、これによつて分れるのである。

昭和廿九年一月、短歌草原誌

編集後記

彼岸が近づき、春光やうやく地にう
る、おうて参りました。各種の選挙も済
み、いよ／＼日本の国是を定め、波濤
高き洋上を切り抜けて進むべき春であ
ります。

私自身最近惻々として太子精神を渴
仰する情しに動き、その萬古不易
の大精神の地に光臨されることを念す
るや切なるものがあります。この願の
一端をいたしまして、毎月廿四日の市
内昭和区小椋町教西寺の午前と午後
法話会に、正像末和讃を讃仰させて頂
いて居ります。

また岡崎市中町の大谷派別院内の同
明会館で、五月廿二日、六月廿六日、
八月廿八日、九月廿五日、十月廿三日、
十一月廿七日の五回、午前に歎異抄の
講話をさせて頂くことに決定いたしま
した。

五ヶ年間の蓬戸不出の生活から、冬
眠からさめた蛙よろしくノロ／＼と動
き始めました。瞑目沈思、病軀の上
注ぎに注いで下さる御同朋の念持力、
唯々忝く、涙謝合掌致して居ります。

○本月号は福島先生の御講話を一回休
ませて頂きました。御諒承願ひます。
△自在丸先生の御原稿は本月で完了。
どうか御遠慮なさらずに、先生に御質
問下さい。先生はよろこんでお答え下
さいませ。御住所は戸畑市中原、九州

工業大学官舎。

△柳瀬先生は益々御元気で、焼けた靴
災の御邸に編集室を含めて新築されま
した由でひそかにおよろこび申し上げ
て居ります。
正月掛けにとお送り下さつた御歌、仮
り表装のまま毎日眺めてをります。そ
の歌は

うららけき光の中に閉きのよし
声のまどかに鶯の鳴く 留治
であります。一月末からほんもの
鶯が狭い庭で時々来て鳴いて居ります

夏季氷屋さんが氷を運ぶ時、解けた
氷水が車からボタ／＼と落ちるのをよ
く見かけることがあります。池山先
生はそれを指されて「煩惱の氷がとけ
て念佛の音がするよ」と仰言つたこと
があります。本月号の柳瀬先生の歌の
生れる心の推移に通じるものを感じま
す。

△太子の御持言は、更に十七憲法の母
胎になつてゐる点も書き副へたかつた
のであります。紙数が足りませず、御
推測願ひます。
一人皆党あり、達れる者すくなし。父
君に順はず、隣りに違ふが虚仮であ
り、一上和らぎ下睦びて云々が唯佛
是真の建現であり、以下皆類同して居
ります。

残るは私共の日常の生活の上にこの
御持言の慈味を頂きませう。

聚墨生

日曜講話案内

毎月 第一、第二、第三日曜
午後一時半

於 一道会館

昭和三十年三月十日印刷
昭和三十年三月十五日発行

一部 十七四(郵税共)
定価 半年 百四(郵税共)
一年分 二百四(郵税共)

名古屋市南区匠上町二ノ二八

編集兼 花田 正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 奥川 正生

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千種印刷所

名古屋市南区匠上町二ノ二八

一道会館
発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

慈光第七卷第三号 昭和三十年三月十五日発行 (毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種 郵便物 認可